豊岡短期大学論集　No.13, 99～108（2016）

再話を通して伝説が今日まで伝えられた要因を探る

城　　重　幸

Investigate the requirements that a legend was recited until today

Sigeyuki Jyo

豊岡短期大学 論集
第 13 号　別 冊
平成 28 年 12 月 20 日　発 行

再話を通して伝説が今日まで伝えられた要因を探る

Investigate the requirements that a legend was recited until today

城　　重　幸

Sigeyuki Jyo

はじめに

郷土の伝説は子どもに郷土愛を育み、人の生き方を諭すものであるが、保育所保育指針（言葉）と幼稚園教育要領(言葉)の領域に位置づくお話の時間に郷土の伝説が近年余り語られなくなっている。本稿では、保育士･幼稚園教諭が積極的に郷土の伝説を再話する一助となるように、「横手五郎(よこてのごろう)の話」が伝説として残り得た要因を明らかにする。

１．研究の仮説

横手五郎(よこてのごろう)は、400年以上の昔、熊本の振興や熊本城築城に多大なる貢献をしたことやそのことを元にこんなこともあったと話が誇張されて広まったこと、そして横手五郎(よこてのごろう)が数奇な運命を辿ったことなどの要因により、「横手五郎(よこてのごろう)の話」が今日まで伝説として語り継がれたのであろう。

２．研究の方法

横手五郎(よこてのごろう)の話にまつわる地名や碑や事物等を調査し、現地の人に横手五郎(よこてのごろう)の話を取材し再話する。

３．伝説の定義

伝説とは、「口承文芸の一種。一族または集団の出自や自然物の由来、異常な体験などを後世に伝えようと語るもの。言い伝え。」（日本語大辞典）

４．調査と考察

（１）横手五郎(よこてのごろう)の出生について

横手五郎の出生について調べたところ、以下の３説が明らかになった。

一説に横手五郎は、天正13年（1585年）に戦国武将・肥後国益城郡赤井城の城主・木山弾正の児として生まれたという。天正15年に天草で乱が起こり、この時、木山弾正は熊本城主・加藤清正と一騎打ちして命を落としてしまう。そこで、五郎の子守役は五郎をつれて熊本の横手村まで落ちのび、五郎を養育したのである。横手村で育ったので通称横手五郎(よこてのごろう)と呼ばれている。

次説として、熊本の対岸の長崎県諫早の長田村の横手に生まれた五郎も横手五郎(よこてのごろう)と呼ばれる怪力の持ち主で、この人物が熊本城の横手堀を造ったと諫早地方では、語り継がれている。

三番目の説として、熊本市北部に山法師塚(やんぼしつか)という所がある。ここは熊本城の築城に際して、石垣造

りや井戸掘りや抜け道造りなどで働いた他国の人夫が仕事を終えて帰郷する際、酒食でもてなしてお城の秘密が漏れないように皆殺しにしたという場所である。熊本城築城には、全国各地から力自慢の人夫が多く集まって来たのである。お城の周りを囲んでいる5.3㎞もある石垣、表面積にして28万㎡もある。城の中には、40から50ｍの深い井戸を120も掘っている。築城には、井戸や石垣の材料となる百貫程の重い石が120万個程は集められており、このような巨大な石を方々の山から運んだとされていることからも、同じ人物がそれらにすべて関わったとは信じがたい。

そのような観点から勘案すると、力自慢の人物が複数いて、それを元に横手五郎像ができあがっているとも推測されるが、熊本城築城に際し加藤清正に滅ぼされた木山弾正の遺児が人夫になって働いた話がもっとも興味をひくということから、加藤清正に滅ぼされた木山弾正の子・横手五郎が主流になって語られたと考えられる。

「横手五郎神社の横手五郎の由来の石碑」

なお、横手五郎神社にある石碑の「横手五郎の由来」には、「伝承によれば横手の五郎は戦国武将益城郡赤井城主木山弾正の遺児で、加藤清正が肥後を統治した文禄・慶長の人と伝えられる。五郎は天正13（1585）年横手村で生まれる。」とある。この由来記は、いろいろと伝承されたものを集約して、平成２年に建てられたたものである。

（２）横手五郎（よこてのごろう）の最期について

熊本市西区横手３丁目での調査の中で、以下の５つの横手五郎の最期について取材ができた。

①　五郎は熊本城の井戸に生き埋めにされた

熊本城築城に際して、清正がもっとも重要視したのは水の確保である。城内には120もの井戸を掘ったというが、その際、横手五郎は人夫として城内に入り込み、井戸掘り等に励み、加藤清正に近づいて清正の命をねらっていたが、発覚してある井戸の底を浚えている時に生き埋めにされた。この悲しすぎる五郎の最期は、地元民の同情をかって語り継がれたのである。

②　五郎は清正公の娘婿になった

横手五郎は熊本城築城に多大に貢献したため、清正に認められて清正の娘婿になったという。清正にはあま姫という娘がいたが、この姫は徳川御三家の紀州家初代の奥方になっているので、あり得ないことである。しかし、横手五郎の話が語り継がれる中で、小さい子どもたちに語ることも多いため、酷い話を避けて、いつしかハッピー・エンドの話に変えていったのである。伝説は、より良いと思える方に変容して語り継がれるものであることが伺える。

③　五郎はジンギス・カンになった

こんな話も伺えた。根強い五郎びいきの高齢者で、しきりと横手五郎は海を渡りジンギス・カ

ンになったと主張された。源義経にもそんな話があるが、英雄伝説にはよくあるパターンである。一人の英雄は他の英雄と結びついて、更に話が大きくなるものである。

④　お城の人柱になった

古来、日本各地の治山治水や巨大建造物の工事等には生贄としての人身御供を捧げる風習があったが、横手五郎もこのように自ら人柱となったという。これは日本古来の風習に叶うので、確かに考えられる。

⑤　仇討ちの機会を狙っていた五郎は、清正公の人柄に魅かれて、後に忠実な家臣となった。

以上５点をまとめると、伝説はただ単に事実だけを語り伝えるものではなく、自然の奇異さや人間のすごさ・素晴らしさ等を子どもに語り聞かせたものであるから、話の根幹を残しつつ語り手の価値観で話が少しずつ変化していって広まって行ったと思われる。あくまで、江戸初期の庶民は文字の読み書きができず、口承が中心であったので、話し手の記憶や価値観でいろんな形の話が残っているのは頷けることである。知られているように外国、とりわけ西洋の児童文学には、「人魚姫」や「マッチ売りの少女」のように死をそのまま表現したものも多くあるが、日本においては勧善懲悪の思想が主流だったので、悲惨な形のままで語り継がれることは少ない。そういう流れの中で上記②③が派生してきたと思われる。また「八郎」や「なばの泣き堰」の伝説のように地域に貢献すべく人柱となったという④の形が生まれてきたのも頷けるものである。

（３）横手五郎にまつわる事跡から

熊本地方には、横手五郎にまつわるものがいくつも残っているとのことであり、それを調査した結果、以下に記すものが存在した。

①　横手阿蘇神社=横手五郎神社

住所（〒860-0046）熊本県熊本市中央区横手３-２

祭神は、健磐龍命［別称］阿蘇大神と横手五郎で、創建時期などは不明であるが、境内社として怪力無双と謳われた横手五郎の像を安置するお堂があり、別名、横手五郎大明神として有名になっている。五郎像は現在も安置されている。五郎の偉業は伝説として残るとともに、いつしか地域の心の中に深く刻み込まれ、神となって信仰の対象になったのである。

②　五郎ヶ池公園と五郎ヶ池憩いの家、横手五郎公民館

公園と池の住所は西区横手３丁目14番２号。横手五郎公民館の住所は西区横手３丁目８－62である。横手五郎はこの地域の稲作振興のために、小坂地域の山水を集めた池を一人で造ったと伝えている。現在、この池は広い公園として整備されている。戦前までは、その下流には田んぼが広がっていたが、今では住宅街になっている。その住宅街の真ん中に「横手五郎公民館」が建っており、地域の交流の拠点となっている。

なお、田畑を潤した横手堀は、下水道として暗渠になっている。このように、地域に貢献した偉業を残しているからこそ、五郎の名前も語り継がれ伝説になったのである。

③　横手五郎屋敷跡

花岡山の北斜面横手３丁目に横手五郎が住んでいたという住居跡が、更地となり残っている。その真北の丘に横手五郎神社が鎮座している。

④　五郎坂

横手五郎神社やと五郎ケ池公園とを結ぶ急坂がある。この坂を五郎は行き来していたらしい。

⑤　地獄坂

熊本城築城の際、花岡山から切り出した石を運ぶ作業に使った道。今でこそ石段が組んであるものの、当時の地獄坂は赤土が剥き出した幅わずか1.5mの急坂、覆いかぶさる木々で真っ暗だった。人足たちは石の重みに潰されそうになりながらも、滑る足を踏ん張りこの坂を「まるで地獄」と恐れ嘆いて登り下りした。この坂を横手五郎は切り出した石を運んだという。

⑥　首掛石

五郎は熊本城下の横手に住んでいた若者で、怪力の持主として知られていた。1.8ｔもある大きな石は数人がかりでも運べなかったものだが、五郎は首に掛けて一人で熊本城まで運んできたと伝えられている。現在、城内の平左衛門丸に存し、怪力伝説の証拠となっている。

⑦　猫伏石

益城町広安地区広崎にある大石。加藤清正は熊本城築城の際、横手五郎に城の土台となる大きな石を探して持ってくることを命じた。木山川上流の河原（現・西原村）で見つけた大きな石３個を猫伏に包み、背中に背負って熊本へ帰る途中、猫伏がその重さに耐えられず府内古閑のところで破けてしまった。五郎は３個のうち２個を両手に抱え、もう一個をその場に残して帰った。その残された巨石は誰も動かすことができず、今でも道端に横たわっている。

※猫伏･･･農作物の収納や穀物の乾燥などに用いる農具

⑧　産女の水

熊本市西区横手３丁目の民家の横にこの「産女の水」がある。強力で知られる五郎がこの水で産湯を使ったという。

⑨　横手五郎の碑

「産女の水」から200メートル程のところに、横手五郎の碑が建っており、一説では生誕地とも伝えている。現在でも、横手五郎碑まで、横手五郎神社から赴いて毎年御霊鎮めの祭事を斎行している。

（４）横手五郎の怪力ぶりのエピソードから

①　五郎は、５歳のころには米俵を担ぐほどの怪力を誇っていた。

②　五郎は、５歳のころには九州一の力持ちの筑後の男を投げ倒した。

③　五郎は、毘沙門天に頼んで75人力を授かった。

④　五郎は、大変な力持ちで１度に15人の人間を抱え上げていた。

⑤　五郎は、清正公の行列が道をふさいだ牛のため立ち往生しているところへ通りかかり、ひょいと牛を担ぎ上げて行列を通してやった。

⑥　五郎は、花岡山から熊本城までの約２㎞を1.8ｔもある凹字形の大石を首にかけて運んだ。

⑦　五郎は、大石３個を猫伏に包んで一人で西原村から益城を通り、途中で猫伏が破れたので益城に１個を置いて、残りの２個は熊本城まで運んだ。

⑧　五郎は、井戸掘りの最中に上から落ちて来た大石を受け止めて、上に放り返した。

⑨　五郎は、花岡山の大きな岩を足で蹴って削り取った。

⑩　五郎は、乳飲み子のころから石臼を引きずって動いていたほどの力持ちだった。

伝説においては、上記のことが真実・事実であるかを追求することは意味のないことである。語り手が、聞き手である子どもに対してより効果的に語る工夫がなされたのである。また、子どもに対して強くあれという願いが込められているととらえることもできる。いずれにしろ横手五郎は、乳飲み子のころから常人とは違う、すごい力持ちとして語り継がれているのである。この力持ちぶりには、神がかったものとして伝えられている。この種のフィクション・脚色は、「横手五郎の話」に限らず偉人伝説には、よくあることである。このようなあり得ないほどの力持ちの話だからこそ、純真な子どもは真剣に耳を傾け、伝説として残ったのである。

（５）横手五郎が成し遂げた事業

横手五郎が手掛けた大事業として以下の４つのことが伝えられており、それが400年以上経った今でも存在している。

①　五郎ケ池造り②横手堀造り③お城の井戸掘り④石垣用の石運び（首掛石・猫伏石）

横手の地域のためや熊本城築城のために、横手五郎が目に見える形で活躍したからこそ、話として残っただけでなく、彼が手がけたという事業が現存していることもあり、語り継がれたのである。

（６）語り継ぐ環境があった

テレビやゲームなどもなく、祖父母等との同居による大家族では、自然と大人から子どもにいろんなことが語られていた。現在では、核家族の時代となり地域の絆が薄れてきて、語り継ぐことができにくくなっている。実際、地域の親世代や子どもたちに取材したが「知らない」という答えが多かった。伝説が残った要因の一つに時代環境があることが痛感させられた。

５．「横手五郎の話」の再話

今から四百数十年前のこと、肥後の国益城木山の赤井城主・木山弾正の嫡男として横手五郎は生まれましたが、弾正が天草の乱で加藤清正に敗れたため、家来の弥太郎は、身をやつして五郎を背負って、こともあろうに、加藤清正の熊本城のすぐそばの横手村の祇園山に、居を構えました。当然、弥太郎は侍の身分を捨て、一途に五郎の養育に当たりました。

「若、あなたは強くならなければなりません。」、「若、あなたの仇は、あのお城の加藤清正です。」、「あなたの父・木山弾正様は、あの憎い清正に、騙されて殺されてしまったのです。」と毎日毎日、言い

聞かされながら、五郎は成長して行きました。当然のこと、五郎は五郎で、強くなりたい、力持ちになりたいと自分自身に言い聞かせて、毎日毎日、鍛練しました。

朝な夕な、祇園山（現・花岡山）を縦横無尽に走りまくっている少年五郎の姿が、いつも見受けられました。そればかりではありません。近くの白川縁（べり）に行き、大きな川石を持ち上げては、投げて遊んでいる五郎も見受けられました。来る日も来る日も、五郎は、一心に体を鍛えたのです。

俺は、あの熊本城主の加藤清正を殺すためにだけ生きているのだ。あの清正は、俺の父上を騙し討ちにした奴だからと、本気に思い込み、日に日に力をつけていきました。

15歳ころには、筋肉隆々の頼もしい若者の姿がもうそこにありました。

「すごい若者がいるぞ。七十五人力だぞ。」と話題になりはじめました。そのころの五郎は、小さい時からの弥太郎の教えをひたすら実行に移すべく、清正に近づく機会をねらっていたのです。

ある日、お城の近くの門の所を五郎が走っていると、人だかりがしていました。何事だろうと、人を掻き分けて前に出てみますと、高札が立っていました。その高札には、〔今から新しいお城を造る。ひいては、力持ちの人夫を求める〕と黒々と大きな字で書いてありました。五郎は、しめたと思いました。うまくいくと俺は清正の近くまで行くことができると、一人ドキドキするのでした。その胸の高鳴りを押さえて、大急いで家に帰り、弥太郎に話しますと、

「若、やっと機会が訪れましたね。」と、そして、

「何とか、人夫になって、父上の仇を。」と涙ぐんで、喜んでくれました。

その次の日、頑丈な若者がお城の役人の面接に並んでいました。神妙な顔をして、いかにも百姓の若者のようないでたちで。

「次。」と、役人の声がかかりました。

「へー。横手に住んでいる五郎といいやす。」

「よし、そこの石を持ち上げてみろ。」目の前には、100キログラムほどの石がありました。何だ。この石かと両手で小さな石ころでも扱うように、五郎はひょいと持ち上げました。

「おおっ。」と役人たちは、驚嘆します。さらに、五郎は、その石を頭の上に差し上げました。そして、頭の上にその石を投げ上げては、再び両手でつかんで見せました。それを何度も繰り返したものですから、もう役人たちの度肝を抜いてしまいました。

「よしよし、わかった。後で沙汰をする。」と役人。ちょっとやりすぎたかと五郎は思いましたが、自分の力自慢を立派にアピールできたとも思いました。そして、見事に採用されたのでした。

採用の次の日から五郎は働きました。一日中、一所懸命に。

「五郎、ちょっと、この石が重い。これを手伝ってくれ。」

「おーい、五郎、頼む、お前でないとこれを動かすのは無理だ。」とあちこちから五郎に声がかかるようになり、いつしか、お城造りに欠かせない存在になっていきました。

ある日のことです。清正公がお城の工事の進み具合を見廻っておられました。その前に、前足で土

煙を上げて、今にも清正公に角を突きつけて襲いかかろうとしている一頭の牛がいました。牛の頭からは湯気が出らんばかりで、伴の者たちには、恐れの表情が見て取れました。これを目にした五郎は、脱兎の如く駆け寄って、両手で牛の両角を握り、投げ飛ばしてしまいました。

「おう。」と一同。

「失礼しました。」と五郎。元の仕事に戻りかけたところに、清正が声をかけました。

「これ、その方の名は何と申すか。」

「ははっ。五郎と申します。」

「その方が、あの噂の横手五郎か。」

「へー」と答えながらも、えっ、もう俺の噂が清正の耳にも届いていたのかと思うのでした。

その一方、弥太郎が教えてくれたように、血も涙も無い極悪人には、どうしても思えない優しさが、清正の顔にあるとも五郎には感じられたのでした。こんな立派なお城を造る人、こんなに人夫にまで気を配る人と、五郎の心は、この時、乱れ始めました。いかん、いかんと五郎。一方、清正はそれからというもの「五郎、五郎。」と何かにつけ、五郎を重宝しました。

「五郎、江津湖に行くぞ。伴をせい。」

「五郎、本丸御殿の中に井戸を掘る。お前にまかせる。掘ってくれ。」といった具合です。

そんな時、重臣の森本儀太夫が、

「殿、五郎をかわいがられるのはいいのですが、あれには、気をつけてください。」

「何、なぜ。」

「はい、あれは、殿があの天草で倒しました木山弾正の倅だそうで、殿のお命を狙っているとのことでございます。」と森本。

「うむ、大方そんなことだろう。」と笑って清正は軽くあしらいました。

こんな時、お城造りの役人が、処罰されたという噂が五郎に聞こえてきました。田植えのころ、清正公が、城普請の見回りをしていると、どうも近在の百姓のような人夫が、働いているのです。

清正公は、伴の者に、

「あの者をこれへ。」と。

「これ、お前はどこの百姓か。」

「は、はい、私めは、清水の百姓にございます。」

「そうか。」

次の日、お城の普請奉行が、清正公の前にいました。

「奉行、その方には、あれほど厳しく農繁期には百姓をお城の作業には使うことは、相ならんと申しつけておいたではないか。なぜ、あの百姓らを使っているのか。」と詰問されました。そして、

「現場監督を処分しろ、今後このようなことが一切ないようにしろ。お百姓は、まず農家の仕事が一番だ。」と。何という百姓思いだろうと五郎は感心するのでした。そればかりではありません。一日

お城で働くと米二合がいただけるのです。お城普請はただ働きが当たり前の時代のことです。
　清正公はここまで、民、百姓のことを考えていらっしゃると五郎の心は乱れます。このような、清正公の噂を聞くにつけ、五郎には、ますます、清正公が偉大に思えてくるのでした。
　今日も、朝から五郎は井戸掘りをして働いています。そこに、清正公が見回りにやって来ました。
「おおっ、五郎、今日も頑張って働いているなあ。」と清正公は、井戸の中を覗き込み、
「おーい。五郎、そんなに頑張って、お前はきつくはないかー。」と声をかけました。すると、井戸深くから
「殿さーん。俺は、きつうなかー。だって、この城は、俺の城と思うとるけん。」
「何、きつくないとな。」
「はい、俺の城だけん。」
「何、五郎。俺の城。」
　やっぱり、噂通りだったのかと清正公。清正公は、すぐに伴の者に命令を出しました。
「そこらから、石垣用の石をたくさん集めて来い。」と。
「ははっ。」と不思議に思いながら、井戸のまわりにたくさんの石が山積みされました。すると、
「井戸の中に、この石を投げ込め。」と清正公。
「えっ。」と付き人たち。
「すぐ、これらの石を投げ込め。」再度の殿の命令に、仕方なく石を抱きかかえて、井戸の中に、
「えいっ。」と目をつぶって投げ込みました。すると、その大きな石が、ポーンと井戸の中から、跳ね上がって来るではありませんか。
「おーい、ボウーッとするな、石を落とすと危なかじゃなかか。」と五郎の声。上では、反対に
「うわーっ。」と周りの者たちが逃げ惑います。そこに、清正公は、
「何をしている。もっと投げ込め。」と。投げ込んだら投げ込んだ分だけ、石が跳ね上がってきます。
「どさっ、どすん。わあ。」と。井戸のまわりは騒然としています。清正公は、
「もっと、早く。もっと、たくさん。」と命令されます。その命令に応じて、数人が一度に石を投げ込みました。五郎は井戸の中で、両手で石を受け止めて石を投げ返していました。そして、
「おーい、危なかぞ。気をつけんか。」と叫びあげます。叫べば叫ぶだけ、石が落ちてきます。投げ上げきれなくなり、五郎は、落ちてくる石を右手で受け止めて、左手で足の下に置きます。次々と足の下に置いていき、下から見上げると井戸のまわりが少し明るみを増して来ました。それだけ足元に石を積んだのです。その時です、五郎は、はっと気づきました。殿さんは、俺を殺す気だなあと。そこで五郎は、大声で、
「殿さーん、俺を殺す気なら、石を投げ込んでも駄目だー。バラスを入れろー。」と叫びました。
　すると清正公は、
「うーむ、そうか、バラスだ。バラスを集めてきて井戸に入れろ。」
　笊いっぱいに入れられたバラスがザーッと一度に何杯も入れられました。井戸の中で、

「なんの、なんの。」と五郎の声が。

第二弾、ザザザッ　足がうずもれました。

第三弾、ザザザッ、ザザザッ　腹までバラスでいっぱいになりました。

と、さらにバラスがザザザッ、ザザザッ、ザザザッ、ザザザッと入れられます。その度、

「うおっ。」「ああ。」という声。

「もっと、入れろ。」と清正公。ザザッと大量のバラスが。

「ああっ。あー、あー」と、声が遠くへ響き渡りました。井戸の中から、土煙りがもくもくと上がって来ました。その土煙の中に、五郎の声も消えて行きました。

6．結論

「横手五郎の話」を取材し再話する中で、伝説として語り継がれるには、横手五郎が横手堀や五郎ケ池を造り、横手地域に多大なる貢献をしたことが、現在まで語り継がれた要因の一つである。その上、横手地方では横手五郎のことを横手五郎神社として祀り、毎年斎事が実施していることも語り継がれている要因である。

次に、横手五郎は、熊本城築城に際して、井戸掘りや石垣造りに人夫として75人力を発揮して常人では考えられない抜群の働きをしたことが、語り継がれた要因の二つ目である。

さらに、清正に殺された地元の殿さま木山弾正の遺児で、清正公を仇としてねらい近づいたが、そのことが露見して、井戸の底に生き埋めにされたという数奇な悲話が、民衆の心に深く刻み込まれたのも、語り継がれた重要な要因の三つ目である。

話の裏付けとして横手五郎にまつわるものが現在も形として残っていることも大きな要因である。

以上、「横手五郎の話」から敷衍すると、伝説として語り継がれたのは主人公が通常の人ではなしえない奇行や偉業をなしたこと、その上、感動的な運命をたどったことが要因としてあげられる。そして、大人から子どもへ口承する環境があったことも大きな要因である。

お　わ　り　に

本稿での要因を伝説・昔話を再話する際のポイントと捉えて、保育士・幼稚園教諭には、郷土の伝説・昔話を発掘してほしい。その上で、各幼稚園・保育園のお話の時間に郷土に伝えられた伝説や昔話が語られることを願うばかりである。

参考文献

「語り手の創生」矢口裕康　南九州大学人間発達研究　第３巻（2013）、 日本語大辞典

保育所保育指針・幼稚園教育要領、 「こどもと文学」小西律　豊岡短期大学